歴史地震
第17号(2001) 158-161 頁
受付日 2002/2/19

庄内地震(1894)の被害と救済

東洋大学非常勤講師* 北原 糸子

Itoko Kitahara

4-4-1-5-201, Nara, Aoba-ku, Yokohama-shi
227-0038 Japan

1894 年 10 月 22 日の荘内地震では、鶴岡以南を除く庄内平野全体に被害が出た。全潰家屋 2777, 死者 723, 住家焼失 1489。この地震で、平田町生石付近に矢流沢断層が生じた。マグニチュードは7. 0と考えられている(宇佐美、1995)。地震後の 10 月 31 日大森房吉が現地調査の入り、また、小藤文治郎も現地において1週間の調査を実施、庄内地震の震源断層の推定を行った。周知のごとく、その成果は『震災予防調査会報告』第 8 号(1984, 11)に公表された。それによれば、上青沢付近に露出した断層を北西、および南西には最上川北岸の新堀あたりまで延長し、これをこの地震の震源断層と推定した。

ところで、この地震を体験した数学者小倉金之助(1885－1962)は、回想録のなかで、次のようにいっている。

「この大震災によって酒田は徹底的に破壊されたのですが、それは私のちょうど10歳(高等1年)のときでありまして、…ことに私の町(船場町)がもっとも甚しく、死者の大部分は私の町から出たのであって、私たちも辛うじて助かったのでした。…日清戦争の最中にあたって、酒田町は地震のために徹底的な災害を受けました。…それがために酒田港の繁栄は一朝にして衰えまして、それ以後再び元の隆盛を見ることができなくなりました。」(『一数学者の回想』(筑摩書房、1967, pp12-13)とノスタルジアを籠めて書いている。以下では飽海・西田川・東田川の被害の分布を見た上で、火災の発生による死者多数の酒田町と松嶺町の各町の被害分布を検討し、次に救済に関する町役場文書の残る松嶺町の事例から震災直後の緊急対応策の過程を検討することにしたい。

1. 被害

庄内地震の各郡の被害は1表のようである。震害の著しい地域は、各町村ごとに全潰率を示した 2 表:でほぼ把握される。 震源断層の確定作業は現在も続けられているものの、庄内地震の震源断層は現在のところ伏在の可能性が指摘され, 地学的に確認されていない現状のようだ(小松原琢「庄内堆積盆地東部における伏在断層の成長に伴う活褶曲の変形過程」地学雑誌 107－3, 1998;太田陽子他、「庄内平野東縁、松山断層の認定と活動期、および関連する諸問題」月刊地球、号外28、2000;山形県「庄内平野東縁断層帯に関する調査他 成果報告書」2000)。

1. 1 酒田町

2 表によれば、酒田町はわずか 8%の全潰率であるが、死者が最も多く出たところである。酒田町の各町の途中集計(3 表、27 年 11 月頃と推定)によると、船場町の全潰はわずか 8 戸であるのに対して全焼 146 戸、死者 72 人であり、次に死者 18 人を出した伝馬町の場合、全潰は一軒もないが全焼 52 戸あるなど、地震による倒壊よりも死者数と焼失戸数との対応関係が深いと一見見受けられる結果である。しかし、他の震災統計の場合についても倒壊した後焼失した家屋は倒壊戸数に算入されず、焼失として処理される場合が殆どであるから、酒田町の被災集計結果も当時の一般的な考え方に基づいて、倒壊後焼失したものは焼失とのみ集計されていると捉えておく(「酒田震災一覧」図参照)。

1. 2 松山町

現在の松山町は 1955 年に松嶺町、内郷村、上郷村が合併して松山町となった。松山町のうち、2 表による全潰率が上郷は 12%に留まるものの、松嶺、内郷がともに 50%近く被害を受けた。各町村の被害の実数は表のようである。被害一覧表の凡例によれば、家屋被害のうち、半潰は「修繕ヲ加フルモ到底回復スルノ見込ナキモノ」、破壊は「多少修繕ヲ加ヘサレハ住居又ハ使用シ難キモノ」とされている。破壊の程度はこの文面だけでは判定しがいが、全潰にたいしては木材払い下げが柱 10 本、半壊に対しては 8 本に対して、破壊は払い下げの対象外であることからも、

* 〒227-0038 横浜市青葉区奈良4丁目 4-1-5-201

被害程度は全 2 者に比べれば断然軽微ということはできよう。

松嶺町は旧陣屋所在地の町場で有り、 人口密度も人口構成も他の 2 町村とは異なっていた。当時作成された松嶺町の焼失、倒壊図が残されている。焼失、倒壊の各町を表に示す。焼失、全潰ともに高い数字の荒町、本町、肴町、新町、片町は上郷から内郷へ抜ける山際に平行に走るメイン道路沿いに並ぶ町々である。この町においても、全焼と倒壊の関係は酒田町の場合と同様、倒壊後全焼したものは倒壊家屋には算入されていないと考えてよいだろう。

2. 救済

庄内地震の救済は資金難で困難を極めた。この年飽海郡月光・日向川洪水、山形市大火、飽海三郡の震災と連続して大災害に見舞われたため、県費のなかから救済、復旧工事費を賄う財源の当てもない事態に立ち至っていたからである。山形県会は災害復旧費補助の嘆願を国会に提出するが、その文面にはかつての酒田港の繁栄は時勢の変遷によって衰微の傾向にあり、洪水氾濫によって港口に砂が流れ治水工事の途上であったことなど、この時期の山形県の置かれた状況が縷々説明されている。災害補助費請願の国会への働きかけは、濃尾地震が第一回議会開設と同時に勅令を以て 500 万円余の災害補助費を支給された前例を踏まえたものであったが、結果として災害補助費 46000 円が与えられたにすぎず、県の災害復旧査定額 27 万円余にも到底及ばない額であった。このため、地方税の増額や県債 10 万円の発行などを行った(渡辺九十九「明治震水災概況」1885, 2月;山形県議会「山形県議会八〇年史」1, 1961)。

しかし、災害発生後現場で処理にあたる町村長はこうした請願による国庫補助などを待つ余裕はない。災害現場に置いて奮闘する松嶺町町長の姿を通して救済施策の展開を見ることにする。

2. 1 松嶺町の場合

飽海郡役所文書(光丘文庫蔵)と松山町役場文書(松嶺町資料館蔵)によって判明する震災後の行政事務を時間的経過とその内容に応じて段階を画すると、凡そ次のような展開となる。

1. 緊急対策;震災後 1 週間(10 月 23 日-10 月 29 日)
2. 被害の把握と救済対象の確定;緊急策後の約 1 ヶ月間(10 月 30 日—11 月末)
3. 被災者の支援策の持続と再建策の模索;議会・政府への働きかけ(12 月—年末まで)
4. その後

3. まとめ

＊震災体験を地震対策や地震研究に国家レベルで活そうとした濃尾地震体験後の災害であったため、庄内地震の災害調査は小藤文治郎の調査、辰野金吾の建築調査に示されるように目的を定めた基礎的資料の蒐集が段取りのよく進められた。

＊しかし、日清戦争の戦費に圧迫されたこと、震災地域が中央政府を離れた東北日本であり、近代化の国家的集中投資の対象範囲外であったこと、義捐金応募がはかばかしくなかったことなど救済面での充実にはほど遠かった。

謝意:庄内地震の資料について、気象協会津村建四朗氏、また、産業総合研究所小松原琢氏から収集された研究資料を一括お譲りいただきました。さらに現地での資料調査には光丘文庫土岐田正勝氏、松山町郷土資料館にご協力いただきました。本稿は歴史地震研究会大会(於象潟郷土資料館)の発表レジメであり、その後の研究成果を盛り込むことができませんでした。ご提供いただき資料を活用した結果は、いずれ発表させていただくつもりです。

1表 荘内地震 山形三郡被害

郡名	全戸数	全焼	全潰	半潰	破壊	全被害戸	死傷者	死傷率
飽海郡	12,769	1,514	1,436	912	3,659	7,521	1260	*16.8%*
東田川郡	6,831	35	1,098	550	717	2,400	394	*16.4%*
西田川郡	1,615	47	201	78	558	884	166	*18.8%*
合計	21,215	1,596	2,735	1,540	4,934	10,805	1820	*16.8%*

*破壊戸数を含む全被害戸に対する死傷ただし、飽海郡のみ「山形県飽海郡震災被害一覧表」
出典:山形県震災被害一覧表(年月不明)、
(飽海郡役所、M27, 12, 13再調)による

2表　山形県三郡町村震災全潰率(1894)

飽海郡				東田川郡	
町村名	全潰率	町村名	全潰率	町村名	全潰率
酒田町	8.00%	南遊佐	5.80%	八栄島	16.10%
松嶺町	46.20%	稲田	3.00%	八栄里	40.00%
上郷	12.00%	西遊佐	12.60%	大和	32.30%
内郷	47.50%	遊佐	8.90%	堂万	45.70%
田沢	1.00%	蕨岡	13.70%	余目	33.50%
南平田	64.00%	川行	6.30%	新堀	45.80%
東平田	11.70%	高瀬	15.80%	栄	37.60%
北平田	16.10%	吹浦	16.20%	広野	68.10%
中平田	24.50%	計	14.80%	押切	44.60%
鵜渡川原	6.70%			十六合	10.70%
西平田	31.50%	西田川郡		長沼	15.70%
上田	13.00%	町村名	全潰率	藤島	1.70%
本楯	8.00%	袖浦	38.90%	東栄	0.80%
一條	27.80%	東郷	9.80%	狩川	0.50%
観音寺	14.60%	西郷	1.30%	渡前	1.10%
大沢	4.10%	大宝寺	0.50%	横山	
日向	5.60%	小計	14.90%	立谷沢	
西荒瀬	5.40%			広瀬	
				計	20.10%

*全潰率＝(全潰＋半潰/2)÷全戸数
*出典「山形県震災被害一覧表」

3表　酒田町被害

実小路	26		1	5
下袋小路	33		2	1
利右衛門	53		1	2
染屋小路	38		5	5
鷹町		6		
外野町		2		1
浜畑町		6	1	1
千目堂前		10		2
上小路	44		2	7
下小路	37		4	6
桜小路	22			4
上荒町	23		5	3
下荒町	29		1	4
・1町	72	12	9	13
上台町	87		3	7
下台町	34	9		5
合計	1016	139	149	131
原簿数子	1345	284	165	172

出典:光丘文庫蔵「震災救助一途」3-63
*1.全潰・半潰を合算した
*2.重傷・軽傷を合算した

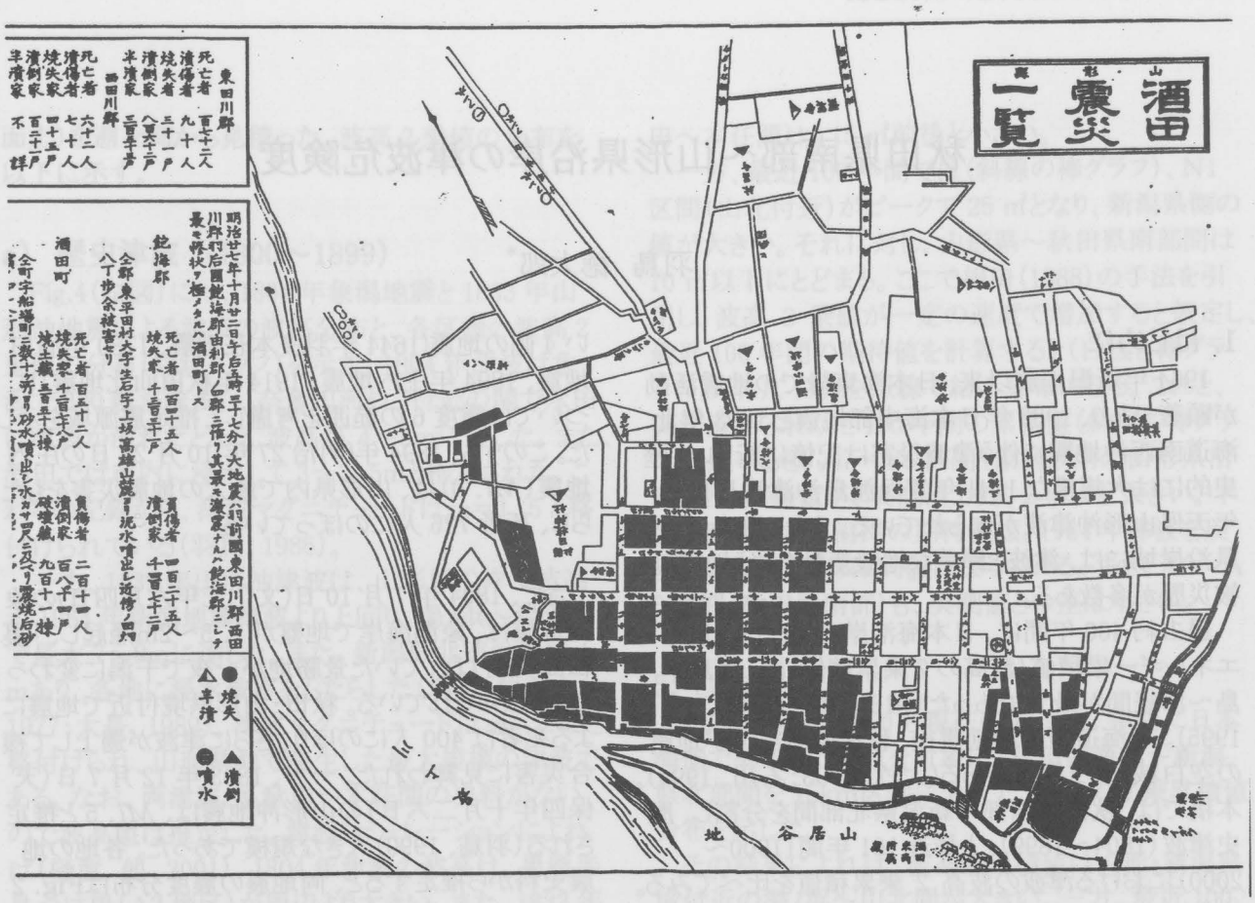
表　松山町被害概要

町村名	総戸数	給付戸数	員数	全焼戸数	全潰	半潰	破壊	死亡者	負傷者
松嶺町	430	422	2127	73	141	115	148	15	133
上郷	392	368	2465		25	44	211	3	3
内郷	362	363	2648	13	146	52	145	47	45

表　庄内地震における松嶺町の被害

町村名	全焼	全潰	半潰	破損	計
南新屋敷		3	4	19	26
元新屋敷		5	8	13	26
南町	1	11	7	13	32
仲町		8	8	14	30
内町		5	15	14	34
新屋敷		3	6	7	16
北町		11	8	3	22
荒町		16	14	22	52
袋町		4	1	1	6
本町	1	10	3	17	31
蔵小路		8	2	2	12
肴町	21	5	1	2	29
新町	31	3	1	1	36
片町	4	31	16	10	61
計	58	123	94	138	413

*「松山町史」(1989)表122を引用


酒田震災一覧
東田川郡
死亡者 百五十二人
潰傷者 九十人
焼失者 三十一戸
潰倒家 八百六十二戸
半潰家 三百五十戸
西田川郡
死亡者 六十二人
潰傷者 七十人
焼失家 四十五戸
潰倒家 百二十一戸
半潰家 不詳
明治廿七年十月廿二日午后五時三十七分ノ大地震ハ羽前國東田川郡西田川郡村后國飽海郡由利郡ノ四郡ニ振リ其最モ激震ナルハ飽海郡ニシテ最モ惨状ヲ極メタルハ酒田町トス
飽海郡
死亡者 四百四十五人
焼失家 千百三十戸
潰倒家 千百七十二戸
全郡東平田村大字北石字上坂高線山麓ヨリ泥水噴出シ近傍ノ田八丁歩余被害セリ
酒田町
死亡者 百五十二人
焼失家 千百七八戸
焼土蔵 五百五十八棟
潰傷者 二百十一人
潰倒家 百八十一戸
破壊蔵 九百十一棟
全町字船場町三数十ヶ所ヨリ砂水噴出シ水カ四尺ニ及リ震後后砂
●焼失
▲潰倒
△半潰
●噴水
地谷居山